Visuddhimagga と Samantapāsādikā (3)

佐々木　閑

第五群

Vinaya の経分別 pārājika 第三条の因縁譚は、不浄観の修習によって死を望むようになった比丘たちが自殺したり互いに殺し合ったり、あるいは Migalaṇḍika という偽沙門に頼んで殺してもらった、というものである。これを機縁として世尊は殺人を禁じる学処を制定することになったという。その因縁譚の中に安般念三昧、すなわち呼吸を観察する精神集中法がでてくる。不浄観によって死を求めるようになった比丘たちの様子を知った世尊が、不浄観とは別の修行法として、この安般念三昧を推奨するのである。この安般念三昧の修行方法を Samantapāsādikā が注釈する際、Visuddhimagga からの多量の文章を利用する。まず Vinaya 本文の文章から示していく。世尊が比丘達を前に、安般念三昧の効用と修行法を語る言葉である。

H. Oldenberg, *The Vinaya Piṭakaṃ,* III, 1881, p. 70, l. 18－p. 71, l. 15 [1].

A：実に比丘たちよ、この、安般念三昧を修習し、多く修すれば、まさに寂静で、勝妙で、純粋で、楽住で、次々生じてくる悪、不善なる諸法を即座に消し去り、鎮める。

B：比丘たちよ、それはたとえば夏の最後の月に、舞い上がった塵埃を、時ならぬ大きな雨雲が即座に消し去り、鎮めるのと同様に、比丘たちよ、安般念三昧を修習し、多く修すれば、寂静で、勝妙で、純粋で、楽住で、生じてくる悪、不善なる諸法を即座に消し去り、鎮めるのである。

C：どのようにして、比丘達よ、安般念三昧を修習し、多く修すれば、寂静で、勝妙で、純粋で、楽住で、生じてくる悪、不善なる諸法を即座に消し去り、鎮

1）SN V, 321；雑阿含八〇三，大正 II, 206a.

めるのか。ここにおいて、比丘達よ、アランニャにいる比丘、樹下にいる比丘、空屋にいる比丘が、膝を組んで座り（結跏趺坐し）、身体を真っ直ぐに保ち、念を面前に据え、念じて出息し、念じて入息する。［すなわち］①長く出息して『私は長く出息する』と意識し、長く入息して『私は長く入息する』と意識する。②短く出息して『私は短く出息する』と意識し、短く入息して『私は短く入息する』と意識する。③『私は一切身を覚知して出息しよう』と学び、『私は一切身を覚知して入息しよう』と学ぶ。④『私は身行を安静として、出息しよう』と学び、『私は身行を安静として、入息しよう』と学ぶ。⑤『私は喜を覚知して出息しよう』と学び、『私は喜を覚知して入息しよう』と学ぶ。⑥『私は楽を覚知して出息しよう』と学び、『私は楽を覚知して入息しよう』と学ぶ。⑦『私は心行を覚知して出息しよう』と学び、『私は心行を覚知して入息しよう』と学ぶ。⑧『私は心行を安静せしめて出息しよう』と学び、『私は心行を安静せしめて入息しよう』と学ぶ。⑨『私は心を覚知して出息しよう』と学び、『私は心を覚知して入息しよう』と学ぶ。⑩『私は心を喜悦せしめて出息しよう』と学び、『私は心を喜悦せしめて入息しよう』と学ぶ。⑪『私は心を等持して出息しよう』と学び、『私は心を等持して入息しよう』と学ぶ。⑫『私は心を解脱せしめて出息しよう』と学び、『私は心を解脱せしめて入息しよう』と学ぶ。⑬『私は無常を観じて出息しよう』と学び、『私は無常を観じて入息しよう』と学ぶ。⑭『私は離貪を観じて出息しよう』と学び、『私は離貪を観じて入息しよう』と学ぶ。⑮『私は滅を観じて出息しよう』と学び、『私は滅を観じて入息しよう』と学ぶ。⑯『私は捨遺を観じて出息しよう』と学び、『私は捨遺を観じて入息しよう』と学ぶのである。比丘達よ、安般念三昧を以上のように修習し、以上にように多く修すれば、寂静で、勝妙で、純粋で、楽住で、生じてくる悪、不善なる諸法を即座に消し去り、鎮めるのである。//1－3//

A：ayaṃ pi kho bhikkhave ānāpānasatisamādhi bhāvito bahulīkato [2] santo c' eva paṇīto ca asecanako ca sukho ca vihāro uppannuppanne ca pāpake akusale dhamme ṭhānaso antaradhāpeti vūpasameti.

B：seyyathāpi bhikkhave gimhānaṃ pacchime māse ūhataṃ rajojallaṃ tam enaṃ mahā akālamegho ṭhānaso antaradhāpeti vūpasameti, evam eva

2） cf. MN I, 421. (Horner, I, 121, note3)

kho bhikkhave ānāpānasatisamādhi bhāvito bahulīkato santo c' eva paṇīto ca asecanako ca sukho ca vihāro uppannuppanne ca pāpake akusale dhamme ṭhānaso antaradhāpeti vūpasameti.

C: [3] kathaṃ bhāvito ca bhikkhave ānāpānasatisamādhi kathañ ca bahulīkato santo c' eva paṇīto ca asecanako ca sukho ca vihāro uppannuppanne ca pāpake akusale dhamme ṭhānaso antaradhāpeti vūpasameti. idha bhikkhave bhikkhu araññagato vā rukkhamūlagato vā suññāgāragato vā nisīdati pallaṅkaṃ ābhuñjitvā ujuṃ kāyaṃ paṇidhāya parimukhaṃ satiṃ upaṭṭhapetvā. so sato 'va assasati [4] sato 'va passasati, dīghaṃ vā assasanto dīghaṃ assasāmīti pajānāti, dīghaṃ vā passasanto dīghaṃ passasāmīti pajānāti, rassaṃ vā assasanto rassaṃ assasāmīti pajānāti, rassaṃ vā passasanto rassaṃ passasāmīti pajānāti, sabbakāyapaṭisaṃvedī assasissāmīti sikkhati, sabbakāyapaṭisaṃvedī passasissāmīti sikkhati, passambhayaṃ kāyasaṃkhāraṃ assasissāmīti sikkhati, passambhayaṃ kāyasaṃkhāraṃ passasissāmīti sikkhati, pītipaṭisaṃvedī assasissāmīti … passasissāmīti sikkhati, sukhapaṭisaṃvedī assasissāmīti … passasissāmīti sikkhati, cittasaṃkhārapaṭisaṃvedī assasissāmīti … passasissāmīti sikkhati, passambhayaṃ cittasaṃkhāraṃ assasissāmīti … passasissāmīti sikkhati, cittapaṭisaṃvedī assasissāmīti … passasissāmīti sikkhati, abhippamodayaṃ cittaṃ −pa− samādahaṃ cittaṃ −pa− vimocayaṃ cittaṃ −pa− aniccānupassī −pa− virāgānupassī −pa− nirodhānupassī −pa− paṭinissaggānupassī assasissāmīti … passasissāmīti sikkhati. evaṃ bhāvito kho bhikkhave ānāpānasatisamādhi evaṃ bahulīkato santo c' eva paṇīto ca asecanako ca sukho ca vihāro uppannuppanne ca pāpake akusale dhamme ṭhānaso antaradhāpeti vūpasametīti.
//1−3//

このVinayaの文と全く同じ文章がSaṃyutta Nikāyaに存在する。Saṃyutta Nikāya 54. 9, Vesālī (Vol. V, pp. 320−322) である。この経典の内容は、世尊が説いた不浄観の修習によって、比丘達が死を望むようになり、互いに殺し合って死ぬ比

3) ここから後AN V, 111f; MN I, 425; III, 82f; 雑阿含八〇三, 大正II, 206a.
4) DN II, 291; MN I, 56; III, 82, 89; Pṭs I, 177. (Horner, I 122, note2)

丘が多かったため、阿難の要請によって世尊が安般念三昧を説くというものである。内容は波羅夷 (pārājika) 第三条の因縁譚と平行である。この二本は、対応する箇所に関しては逐語的に一致しており、同一起源であることは間違いない。しかしそれは両者が全同という意味ではない。話の前半、世尊が安般念三昧を説き始めるまでの文章においては Vinaya にある文のかなりの部分が Saṃyutta Nikāya にはない。たとえば死を望んだ比丘達が Migalaṇḍika という偽沙門に頼んで殺してもらうという箇所は Saṃyutta Nikāya には全く存在しない。この違いは、なんらかの偶然によって Saṃyutta Nikāya の文章が脱落したとか、あるいは Vinaya に無関係な文が紛れ込んだという類の現象ではない。Vinaya, Saṃyutta Nikāya ともに文脈に乱れはなく、それ自体で合理的な一貫性を持っている。つまり意図的な作業によって Vinaya の文の不要（と考えられた）部分が除去されて Saṃyutta Nikāya になったか、あるいは逆に Saṃyutta Nikāya の文がもともとあったところへ更に Migalaṇḍika の話などが組み入れられて Vinaya の因縁譚になったかどちらかであると考えられる。(もちろん両者共通の源泉があり、それが異なる経路を経て一方は Vinaya 因縁譚に、一方は Saṃyutta Nikāya になったという可能性も当然あり得るが)。いずれにしろ Saṃyutta Nikāya 5. 321, Vesālī と Vinaya 波羅夷第三条の因縁譚は同じ源泉を持つパラレルな資料なのである。

上で示した安般念三昧の効用と修行法を語る世尊の言葉は、Vinaya 波羅夷第三条の因縁譚の一部であるから、もちろん対応する文が Saṃyutta Nikāya 5. 321に含まれているのだが、それは全く逐語的に対応している。Vinaya pārājika III. 1. 3 (Vol. III, p. 70, l. 19－p. 71, l. 15) と Saṃyutta Nikāya Vol. V, p. 321, l. 21－p. 322, l. 13の部分である。この部分に関しては Vinaya と Saṃyutta Nikāya の間に食い違いは一切ない。つまり、上で示したのと全く同じ文章が Saṃyutta Nikāya に入っているのである。

Samantapāsādikā は、この Vinaya 本文の文章に対して、pp. 402－435の34ページにわたる長大な注釈を加える。そしてその注釈の大半は Visuddhimagga pp. 267－291と一致する。ということは Visuddhimagga では、上の Vinaya の文章と類似した文を「簡潔な文句」として冒頭に置き、それを注釈するかたちで「詳細な解説文」が書かれているということになる。だからこそ、その「詳細な解説文」をそのまま Samantapāsādikā に転用できるのである。そこで次に、その Visuddhimagga の「簡潔な文句」を見ることにする。それは上の Vinaya の文章とどれほど類似し、どこが異なっているのかを確認しなければならない。

安般念三昧に関する Visuddhimagga の「簡潔な文句」は pp. 266－267にある。原文と和訳をすべてだす余裕はないので、上の Vinaya の文章でのA，B，Cという区分けを用いて説明する。まず冒頭は Vinaya と全く同じAの文が来る。ところがそのあとにBはない。そのかわりに“ti evaṃ pasaṃsitvā”（「とこのように称賛してから」）というつなぎの文が入って、その直後にCがくる。「このように称賛してから」というこのつなぎの文は、AとCが同一経典の中の一連の文章であることを想定しているに違いないから、Visuddhimagga の作者（あるいは Visuddhimagga が依った原資料の作者）は、もとの経典の文がA→B→Cという構造であることを承知しており、そのBを省略して、A→Cという形を「簡潔な文句」として採用し、除去したBのあとを埋めるために「このように称賛してから」というつなぎの一文を入れたものと考えられる。確かにBの内容はAをにわか雨の比喩で説明し直しているだけのものであるから、省略しても、教義上の問題は何ら生じない。そしてその本来のA→B→Cという構造を持つ聖典としては先に言ったとおり、Vinaya 波羅夷第三条（Vol. III, p. 70, l. 19－p. 71, l. 15）と Saṃyutta Nikāya Vol. V, p. 321, l. 21－p. 322, l. 13 の二カ所しか確認できないわけだから、Visuddhimagga の「簡潔な文句」の出典は、この二カ所ということが言えるのである。Vinaya と Saṃyutta Nikāya の該当個所はA→B→Cという構造を持っているのだから、Vinaya を注釈する Samantapāsādikā はBの中の文句に対しても注釈しなければならない。一方、Bを省いてA→Cという形を「簡潔な文句」として採用した Visuddhimagga の「詳細な解説文」には、Bに対する注釈が含まれるはずはない。したがって Samantapāsādikā が Visuddhimagga の文を転用するにしても、Bの部文に対する注釈は Visuddhimagga には含まれていないのだから転用のしようもない。それは Samantapāsādikā を書く時点で新たに作成しなければならなかったはずである。そして確かに Samantapāsādikā はそうしている。この点に関しては、このあと Visuddhimagga と Samantapāsādikā の実際の相違点を見ていく中で論じることにする。以上、Vinaya（およびそれと同一の Saṃyutta Nikāya）がA→B→Cという構造を取るのに対して、Visuddhimagga はBを除いてA→Cという形を「簡潔な文句」と想定している事実を指摘した。両者にはもう一つ違いがある。Cの末尾の一文が Visuddhimagga では略されているのである。Vinaya および Saṃyutta Nikāya ではCの末尾に次の文があるが、Visuddhimagga の「簡潔な文句」にはそれが含まれていないのである。

「比丘達よ、安般念三昧を、以上のように修習し、以上にように多く修すれば、まさに寂静で、勝妙で、純粋で、楽住で、次々生じてくる悪、不善なる諸法を

即座に消し去り、鎮めるのである」

"evaṃ bhāvito kho bhikkhave ānāpānasatisamādhi evaṃ bahulīkato santo c' eva paṇīto ca asecanako ca sukho ca vihāro uppannuppanne ca pāpake akusale dhamme ṭhānaso antaradhāpeti vūpasametīti."

Visuddhimaggaでは、「簡潔な文句」は、その直前の"passasissāmīti sikkhati"（『私は捨遺を観じて入息しよう』と学ぶのである）で終わっていて、そのあとに"ti evaṃ soḷasavatthukaṃ ānāpānasatikammaṭṭhānaṃ niddiṭṭhaṃ"（と、以上のように十六事からなる安般念業處が説示された）という作者の言葉が始まる。Cの末尾の文はAと同文であるから、繰り返す必要がないということでVisuddhimaggaはそれを切ってしまったのだろう。以上、Vinaya本文とVisuddhimaggaの「簡潔な文句」について見てきた。両者には若干の違いもあるが、大筋はほぼ同一である。そこで次に、Vinayaを注釈するSamantapāsādikāと、Visuddhimaggaの中で「簡潔な文句」を注釈する「詳細な解説文」がどのように対応し、どのように食い違っているのかを見ていくことにする。なお、あらかじめ言っておくと、以下の論考でとりあげるいくつかの問題点に関して、『善見律毘婆沙』は特記すべき重大な情報をもたらさない。今回とりあげたSamantapāsādikāの箇所と対応するのは大正二十四巻の745ページ中段から750ページ中段にかけてであり、中には両者が相違する点も多く、それはそれで研究の対象として重要である。しかし、今から考察していく、Visuddhimaggaと Samantapāsādikāの相違点をめぐっては、『善見律毘婆沙』の内容はSamantapāsādikāに合致しており、とりたてて指摘するようなことはないのである。（他方、『解脱道論』にはきわめて重大な情報が含まれており、それについては以下の論考の中で触れる）。

○ 先ず、Samantapāsādikāと、Visuddhimaggaの「詳細な解説文」では、注釈を開始する冒頭部分に大きな違いがある。今ほど述べたように、Samantapāsādikāは A→B→C という構造を持つVinaya本文を注釈していくわけだから、当然のことながらAの中の最初の語である"ayaṃ pi kho bhikkhave"から順に注釈を加えていくことになる。それがPTS本Samantapāsādikā，402ページ26行目である。一方Visuddhimaggaの方は、Bを省いてA→Cというかたちの文章を「簡潔な文句」として出してきて、それに対する注釈の形で「詳細な解説文」を展開していく。しかしBが省かれたからといって冒頭にAがくることに変わりはないのだから、「詳細な解説文」はAの中の最初の語句に対する注釈から始まっているはずである。つまり冒頭部分はSamantapāsādikāと同じ出だしになっていると予想されるのであ

る。ところが実際はそうなっていない。Visuddhimagga ではAの中の語句に対する注釈は全く存在しない。Visuddhimagga はCの冒頭にある“kathaṃ bhāvito ca bhikkhave ānāpānasatisamādhi”という文句から注釈を始めるのである。(PTS本 Vism, p. 267, l. 18) これが何を意味しているのかというと、Visuddhimagga はあくまでCだけを「簡潔な文句」であると考えていて、その前に置かれているAの文章は「簡潔な文句」に含めていないということなのである。Aは安般念三昧を修習することによって得られる功徳を語る。Bはそれをにわか雨にたとえる比喩である。そしてCは、その安般念三昧の具体的な修習方法である。本来 Saṃyutta Nikāya および Vinaya ではこの三要素がA→B→Cの順で並んでいた。しかし Visuddhimagga はそのBを省いてしまって代わりに「とこのように称賛してから」(ti evaṃ pasaṃsitvā) というつなぎの句を挿入し、それに続けてCをだす。一見すると、そうやって改変されたA→Cという形の文章全体を「簡潔な文句」であると言っているように見えるのだが、そうではないのである。Visuddhimagga が「簡潔な文句」であると想定しているのはあくまでCの部分だけであって、Aは単なる導入句にすぎず、注釈の対象にはなっていないのである。したがって Visuddhimagga は「詳細な解説」をCの冒頭の語句、“kathaṃ bhāvito ca bhikkhave ānāpānasatisamādhi”に対する注釈から始めるというわけである。したがって当然、それは Samantapāsādikā の出だしとは違ってくることになる。この様子をもっと詳しく見るため、かなり長くなるが Visuddhimagga、Samantapāsādikā，両方の冒頭部分を提示して比較してみよう。(文中の下線につけた記号V，Sはそれぞれ Visuddhimagga, Samantapāsādikā を示す。たとえば Visuddhimagga のV－①と Samantapāsādikā のS－①部分がパラレルという意味である。)

Visuddhimagga, p. 267, l. 13－p. 268, l. 17 (簡潔な文句に続いて)。

以上のように十六の事からなる安般念業處が説示された。その［安般念業處の］修習の理論［を語ることに］なったわけだが、聖語 (pāḷi) の注釈に沿って語っていけば、それはすべての点で充足されることになるから、ここでは、その聖語注釈を優先して示すことにする。

(Smp ではここに「次に」(idāni) が入る) V-①**どのようにして、比丘達よ、安般念三昧を修習し**、というここにおいて、まず**どのようにして**とは安般念三昧の修習を様々な面から詳説しようと考えての質問である。**比丘達よ、安般念三昧を修習し**というのは、様々な面から詳説しようと考えることによって質問された法を示している。どのように、多く修された、乃至、鎮めるのか、というここにおいても全く

同様の理屈が適用される。

そこにおいて、v-②**修習された**とは、起こされた、または増大せられたである。v-③**安般念三昧**とは、安般を完全に把握する念と結びついた三昧である。あるいは安般念における三昧が安般念三昧である。v-④**多く修された**とは、何度も繰り返された、である。**まさに寂静で、勝妙で**、(santo c' eva paṇīto ca) とは、まさに寂静で、まさに勝妙で (santo c' eva paṇīto c' eva) である。「まさに」(eva) という語が両方の箇所に作用していると理解すべきである。[この語によって] 何が言われているのかというと、この [安般念三昧] は、不浄業處が単に通達に関してだけ寂静で勝妙であって、所縁が麁であることおよび所縁が厭逆であることによって、所縁に関しては寂静でも勝妙でもないのとは違って、どの面から見ても、寂静でなく勝妙でないということはないというのである。すなわち所縁の寂静性によっても寂静 [つまり] 寂まっており、寂滅であり、通達と呼ばれる支分の寂静さによっても [そうなのである。また、] 所縁の勝妙さによっても勝妙である、[つまり] 満足することがないのであって、[通達と呼ばれる] 支分の勝妙さによっても [そうである]。それゆえ、まさに寂静で、勝妙で、と言われたのである。一方、**純粋で、楽住で**、というここにおいて、それに混ざりもの (secana) がないのが純粋であって [すなわち] 夾雑物がない、充足している、単一である、不共である [ということであって]、この [安般念三昧] では、遍作 (parikamma) とか近分 (upacāra) によって寂静さがあるのではなく、最初の注意 (samannāhārato, ※ここが Smp では manasikārato になっている) からずっと、自己の本性としてまさに寂静であり勝妙であるという意味である。一方、ある人々は「純粋で、とは夾雑物がなく、滋養に富んでおり、本性として美味ということだ」と言う。[5] このように純粋な、[6] この [安般念三昧は] 心が安立する刹那毎に、身体的および精神的な楽の獲得のために作用するものであるから、楽住であると理解せよ。**次々生じてくる**とは鎮伏されず [さらにまた] 鎮伏されない、[ということである]。**悪なる**とは劣悪な、である。**不善なる諸法を**とは、不善巧から生じた諸法を、である。**即座に消し去り**とは、その刹那に消し去る [すなわち] 鎮伏するのである。**鎮める**とは、うまく寂止するのである。あるいは、順決擇分であることにより、次第に聖道を増大

5) Sāratthadīpanī-ṭīkā によれば uttaravihāravāsika たちであるという。Pāli-Granthamālā 本、Vol. II, p. 140. Paramattha-mañjūsā にも同じことが言われている。Bhikkhu ñāṇamoli, *The Path of Purification,* Kandy [1956], p. 783, note 38参照。

6) PTS 本は secanaka になっているが、asecanaka と直して読む。『南伝大蔵経』第六十三巻, p. 124, note 6における水野弘元の指摘を見よ。

させるに至り、[悪、不善なる諸法を] 断ち切り、止息するということが意味されているのである。

ti evaṃ soḷasavatthukaṃ ānāpānasatikammaṭṭhānaṃ niddiṭṭhaṃ. tassa bhāvanānayo anuppatto. so pana yasmā pāḷivaṇṇanānusaren' eva vuccamāno sabbākāraparipūro hoti, tasmā ayam ettha pāḷivaṇṇanā pubbangamo niddeso.

v-① *kathaṃ bhāvito ca, bhikkhave, ānāpānasati-samādhi* ti ettha tāva: *kathan* ti ānāpānasatisamādhibhāvanānaṃ nānappakārato vitthāretukamyatā pucchā. *bhāvito ca, bhikkhave, ānāpānasati-samādhī* ti nānappakārato vitthāretukamyatāya puṭṭhadhammanidassanaṃ. *kathaṃ bahulīkato ... pe ... vūpasametī* ti etthā pi es' eva nayo. tattha v-② *bhāvito* ti uppādito, vaḍḍhito vā. v-③ *ānāpānasati-samādhī* ti ānāpānapariggāhikāyasatiyā saddhiṃ sampayutto samādhi, ānāpānassatiyaṃ vā samādhi ānāpānasati-samādhi. v-④ *bahulīkato* ti punappunaṃ kato. *santo ceva paṇīto cā* ti santo ceva paṇīto ceva, ubhayattha eva saddena niyamo veditabbo. kiṃ vuttaṃ hoti ? ayaṃ hi, yathā asubhakammaṭṭhānaṃ kevalaṃ paṭivedhavasena santañ ca paṇītañ ca, oḷārikārammaṇattā pana paṭikūlārammaṇttā ca ārammaṇavasena neva santaṃ, na paṇītaṃ, na evaṃ kenaci pariyāyena asanto vā apaṇīto vā, atha kho ārammaṇasantatāya pi santo vūpasanto nibbuto, paṭivedhasaṅkhātaangasantatāya pi, ārammaṇapaṇītatāya pi paṇīto atittikaro angapaṇītatāya pī ti tena vuttaṃ santo ceva paṇīto cā ti. *asecanako ca sukho ca vihāro* ti ettha pana nāssa secanan ti asecanako; anāsittako abbokiṇṇo paṭiyekko āveṇiko. natthi ettha parikammena vā upacārena vā santatā ; ādi samannāhārato pabhuti attano sabhāven' eva santo ca paṇīto cā ti attho. keci pana asecanako ti anāsittako ojavanto sabhāven' eva madhuro ti vadanti. evam ayaṃ secanako ca appitappitakkhaṇe kāyikacetasikasukhapaṭilābhāya saṃvattanato sukho ca vihāro ti veditabbo. *uppannuppanne* ti avikkhambhite avikkhambhite. *pāpake* ti lāmake. *akusale dhamme* ti akosallasambhūte dhamme. *ṭhānaso antaradhāpetī* ti khaṇen' eva antaradhāpeti vikkhambheti. *vūpasametī* ti suṭṭhu upasameti, nibbedhabhāgiyattā vā anupubbena ariyamaggavuddhippatto samacchindati, paṭippassambhetī ti vuttaṃ hoti.

Samantapāsādikā, p. 402, l. 26—p. 405, l. 1.

そこで世尊は乃至比丘達におっしゃった。実に比丘達よと呼びかけてから、さらに比丘達が阿羅漢果に到達できるように、以前語った不浄業處とは別のやり方を語って、**安般念三昧**と言ったのである。今、世尊によって、比丘達に、寂静で洗練された業處を示すためにこの聖語（pāḷi）が説かれたのであるから、意味の繋がりの順序を失わないようにして、これについての注釈を加えよう。そこにおいて先ず　実に比丘たちよ、これも　という句の繋がりは次のようである。「比丘達よ、不浄の修習だけが煩悩の滅除に作用するわけではなく、実に、この安般念三昧も、乃至、鎮めるのである」。一方、ここでの意味の解釈は次のようである。s-③**安般念**とは、安般を完全に把握する念である。『無礙解（Paṭisambhidā）』にも次のように説かれているからである。「安（āna）とは入息（assāsa）であって出息（passāsa）ではない。般(pāṇa)とは出息であって入息ではない。入息の力による近住（upaṭṭhāna）が念である。出息の力による近住が念である。入息する者には［念］が近住し、出息する者には［念］が近住する」と[7]。s-③**三昧**とは、その、安般を完全に把握する念とともに生じる心一境性である。この説示は、三昧を主眼とするもので、念を主眼とするものではない[8]。それゆえ、s-③安般念と結びついた三昧が安般念三昧であり、あるいは安般念における三昧が安般念三昧であると、このようにここでの意味は理解されるべきである。s-②**修習された**とは、起こされ、増大せられたである。s-④**多く修された**とは、何度も繰り返された、である。**まさに寂静で、勝妙で**（santo c' eva paṇīto ca）とは、まさに寂静で、まさに勝妙で（santo c' eva paṇīto c' eva）である。「まさに」（eva）という語が両方の箇所に作用していると理解すべきである。［この語によって］何が言われているのかというと、この［安般念三昧］は、不浄業處が単に通達に関してだけ寂静で勝妙であって、所縁が麁であることおよび所縁が厭逆であることによって、所縁に関しては寂静でも勝妙でもないのとは違って、どの面から見ても、寂静でなく勝妙でないということはないというのである。すなわち所縁の寂静性によっても寂静である、［つまり］寂まっており、寂滅であり、通達と呼ばれる支分の寂静さによっても［そうなのである。また、］所縁の勝妙さによっても勝妙［つまり］満足することがないのであって、［通達と呼ばれる］支分の勝妙さによっても［そうである］。それゆえ、まさに寂静で、勝妙で、と言われたのである。一方、**純粋で、楽住で**、というここにおいて、それに混ざりもの（secana）がないのが純粋であって［すなわち］夾雑物がない、充

7） Paṭisambhidāmagga, I, p. 172.
8） ここから Vism と平行句。Vism p. 267.

足している、単一である、不共である［ということであって］、この［安般念三昧］では、遍作（parikamma）とか近分（upacāra）によって寂静さがあるのではなく、最初の作意（※ここが Vism では samannāhārato になっている）からずっと、自己の本性としてまさに寂静であり勝妙であるという意味である。一方、ある人々は「純粋で、とは夾雑物がなく、滋養に富んでおり、本性として美味ということだ」と言う。[9] このように純粋な、この［安般念三昧は］心が安立する刹那毎に、身体的および精神的な楽の獲得のために作用するものであるから、楽住であると理解せよ。**次々生じてくる**とは鎮伏されず［さらにまた］鎮伏されない、［ということである］。**悪なる**とは劣悪な、である。**不善なる諸法**をとは、不善巧から生じた諸法を、である。**即座に消し去り**とは、その刹那に消し去る［すなわち］鎮伏するのである。**鎮める**とは、うまく寂止するのである。あるいは、順決擇分であることにより、次第に聖道を増大させるに至り、［悪、不善なる諸法を］断ち切り、止息するという意味である。**それはたとえば**というこれは、比喩を示すものである。**夏の最後の月に**とは、アーサールハ月（āsāḷha）である。**舞い上がった塵埃を**とは、半月間において、熱風で乾燥するため、牛や水牛などの足で踏まれて粉砕されることにより、地面から上にはたき出された［ということで］舞い上がった［すなわち］空中に上がった塵と塵芥をである。**時ならぬ大きな雨雲が**とは、全天空を覆ってわき上がる、アーサールハの白分における半月全般にわたる、雨雲のことである。それは降雨時にならなくても起こってくるので、時ならぬ雨雲なのだ、というのがここで言おうとしていることである。**即座に消し去り、鎮める**とは、即座に見えなくする、地面にしずめるのである。**同様に**、というこれは比喩の完結である。以下は、先に言ったのと同じである。

次に$_{S-①}$**どのようにして、比丘達よ、安般念三昧を修習し**、というここにおいて、「どのようにして」とは安般念三昧の修習を様々な面から詳説しようと考えての質問である。「比丘達よ、安般念三昧を修習し」というのは、様々な面から詳説しようと考えることによって質問された法を示している。二番目の句についても全く同様の理屈が適用される。

atha kho bhagavā…pe…bhikkhū āmantesi: ayam pi kho bhikkhave ti, āmantetvā ca pana bhikkhūnaṃ arahattapattiyā pubbe ācikkhita-asubhakammaṭṭhānato

9）Sāratthadīpanī-ṭīkā によれば uttaravihāravāsika たちであるという。Pāli-Granthamālā 本、Vol. II, p. 140. Paramattha-mañjūsā にも同じことが言われている。Bhikkhu ñāṇamoli, *The Path of Purification,* Kandy［1956］, p. 783, note 38参照。

aññaṃ pariyāyaṃ ācikkhanto *ānāpāṇasatisamādhī* ti āha. idāni yasmā bhagavatā bhikkhūnaṃ santapaṇītakammaṭṭhānadassanattham eva ayaṃ pāḷi vuttā, tasmā aparihāpetvā atthayojanākkamaṃ ettha vaṇṇanaṃ karissāmi. tatra ayam pi kho bhikkhave ti imassa tāva padassa ayaṃ yojanā bhikkhave na kevalaṃ asubhabhāvanā yeva kilesappahānāya saṃvattati api ca ayam pi kho ānāpāṇasatisamādhi···pe···vūpasametīti, ayam pan' ettha atthavaṇṇanā, s-③*ānāpānasatī*ti assāsapassāsapariggāhikā sati. vuttaṃ h' etaṃ Paṭisambhidāyaṃ : ānan ti assāso no passāso, pāṇan ti passāso no assāso. assāsavasena upaṭṭhānaṃ sati passāsavasena upaṭṭhānaṃ sati. yo assasati tass' upaṭṭhāti, yo passasati tass' upaṭṭhātīti. s-③*samādhī*ti tāya ānāpāṇapariggāhikāya satiyā saddhiṃ uppannā cittekaggatā, samādhisīsena cāyaṃ desanā na satisīsena, tasmā s-③ānāpāṇasatiyā yutto samādhi ānāpāṇasatisamādhi, ānāpāṇasatiyaṃ vā samādhi ānāpāṇasatisamādhīti evam ettha attho veditabbo. s-②*bhāvito* ti uppādito, vaḍḍhito ca. s-④*bahulīkato* ti punappuna kato. *santo c' eva paṇīto cā* ti santo c' eva paṇīto c' eva, ubhayattha eva saddena niyamo veditabbo. kiṃ vuttaṃ hoti ? ayaṃ hi yathā asubhakammaṭṭhānaṃ kevalaṃ paṭivedhavasena santañ ca paṇītañ ca, oḷārikārammaṇattā pana paṭikkūlārammaṇattā ca ārammaṇavasena n' eva santaṃ, na paṇītaṃ, na evaṃ kenaci pariyāyena asanto vā appaṇīto vā, api ca kho ārammaṇasantatāya pi santo vūpasanto nibbuto, paṭivedhasaṅkhāta-aṅgasantatāya pi, ārammaṇapaṇītatāya pi paṇīto atittikaro aṅgapaṇītatāya pīti tena vuttaṃ santo c' eva paṇīto cā 'ti. *asecanako ca sukho ca vihāro* ti ettha pana nāssa secanan ti asecanako ; anāsittako abbokiṇṇo pāṭekko āveṇiko. n' atth' ettha parikammena vā upacārena vā santatā ; ādiṃ manasikārato ppabhūti attano sabhāven' eva santo ca paṇīto cā ti attho. keci pana asecanako ti anāsittako ojavanto sabhāven' eva madhuro ti vadanti. evam ayaṃ asecanako ca appitappitakkhane kāyikacetasikasukhapaṭilābhāya saṃvattanato sukho ca vihāro ti veditabbo. *uppannuppanne* ti avikkhambhite avikkhambhite. *pāpake* ti lāmake. *akusale dhamme* ti akosallasambhūte dhamme. *ṭhānaso antaradhāpetī*ti khaṇen' eva antaradhāpeti vikkhambheti. *vūpasametī*ti suṭṭhu upasameti, nibbedhabhāgiyattā vā anupubbena ariyamaggavuddhippatto samucchindati, paṭippassambhetīti pi attho. *seyyathāpī*ti opammanidassanam etaṃ. *gimhāna*ṃ *pacchime māse* ti āsāḷhamāse.

ūhataṃ rajojallan ti addhamāse vātātapasukkhāya gomahisādipādappahāra-sambhinnāya paṭhaviyā uddhaṃ hataṃ ūhataṃ ākāse samuṭṭhitarajañ ca reṇuñ ca. *mahā akālamegho* ti sabbaṃ nabhaṃ ajjhottharitvā uṭṭhito, āsāḷhajuṇ-hapakkhe sakalaṃ addhamāsaṃ vassanakamegho. so hi asampatte vassakāle uppannattā akālamegho ti idha adhippeto. *ṭhānaso antaradhāpeti vūpasametī*ti khaṇen' eva adassanaṃ neti paṭhaviyaṃ sannisīdāpeti. *evam eva kho* ti opam-masampaṭipādanam etaṃ, tato paraṃ vuttanayam eva. idāni S-①*kathaṃ bhāvito ca bhikkhave ānāpāṇasatisamādhī*ti, ettha kathan ti ānāpāṇasatisamā-dhibhāvanaṃ nānappakārato vitthāretukamyatā pucchā, bhāvito ca bhikkhave ānāpāṇasatisamādhīti nānappakārato vitthāretukamyatāya phuṭṭ hadhammanidassanaṃ, esevanayo dutiyapade pi.

両資料の下線部分を対応させてみて明らかなように、かなりの部分がパラレルなのだが、その順序は大きく違っている。Visuddhimagga ではV－①が始めに現れるが、それに対応するS－①は Samantapāsādikā では最後に置かれている。またV－③に対応するS－③は三つに分かれて置かれている。こういった違いの理由を詳しく見ていこう。

まず全体の構成がこれほど大きく違っている理由であるが、それは Visuddhi-magga がC部分だけを「簡潔な文句」として採用していることにある。Cの部分を頭から見ていくと、そこには次のような語句が並ぶ。

C : kathaṃ bhāvito ca bhikkhave/ānāpānasatisamādhi/kathañ ca bahulīkato/santo c' eva paṇīto ca/asecanako ca sukho ca vihāro/uppannuppanne ca/pāpake/akusale dhamme/ṭhānaso antaradhāpeti/vūpasameti.

Visuddhimagga では、この順番でこれらの語句を注釈していくわけである。これに対して Samantapāsādikā はA→B→Cという構造の Vinaya の文を頭から注釈していくのだから、注釈する語句が Visuddhimagga とは異なってくる。その語句を並べれば、次のようになる。

A : ayam pi kho bhikkhave/ānāpānasatisamādhi/bhāvito/bahulīkato/santo ce' eva paṇīto ca/asecanako ca sukho ca vihāro/uppannuppanne ca/pāpake/akusale dhamme/ṭhānaso antaradhāpeti/vūpasameti.

B : seyyathāpi bhikkhave/gimhānaṃ pacchime māse/ūhataṃ rajojallaṃ /tam enaṃ/mahā akālamegho/ṭhānaso antaradhāpeti/vūpasameti/evaṃ eva kho/(以

下略)

C : kathaṃ bhāvito ca bhikkhave/ānāpānasatisamādhi/kathañ ca bahulīkato/santo c' eva paṇīto ca/asecanako ca sukho ca vihāro/uppannuppanne ca/pāpake/akusale dhamme/ṭhānaso antaradhāpeti/vūpasameti.

Visuddhimagga の「詳細な解説文」はCの初めの kathaṃ の注釈から始まるが、Samantapāsādikā では、その kathaṃ はA, Bの各語句の注釈が終わったあとで始めて現れる。したがってV－①に対応するS－①がかなりあとになって現れるのである。Visuddhimagga は kathaṃ に続いて bhāvito, ānāpānasatisamādhi という語を順番に注釈するが、一方の Samantapāsādikā はAの語順に従って ānāpānasatisamādhi、bhāvito の順で注釈しなければならない。そこで Samantapāsādikā は、Visuddhimagga の中の bhāvito, ānāpānasatisamādhi に対する注釈文を抜き出して、順序を逆にして ānāpānasatisamādhi、bhāvito の順で並べ替える。したがって両資料では、この二つの語の注釈は順序が逆になって現れる。これが、V－②、V－③と、それに対応するS－②、S－③が逆の順序で現れる理由である。Aの中に現れてくる語句の多くはCとも共通しているため、Samantapāsādikā がAの各語句を注釈する際に、Cを注釈する Visuddhimagga の文章を転用するが、語句が現れる順番はAとCで違っているため、転用に際して並べ替えが行われているのである。

Samantapāsādikā はA→B→Cという順番で語句の注釈を行うが、AとCの語句は多くが共通しているため、A部分を注釈する際に、Cの語句を注釈する Visuddhimagga の文章を抜き出してA部分の語順に合うように並べ替えて利用している、というわけだが、そうなると Samantapāsādikā の注釈がCの部分にさしかかった時はどうなるであろうか。Cの中の語句の多くはAと共通しており、そのため、その注釈はすでにA部分の注釈段階で済んでしまっている。もはやC部分をあらためて注釈する必要は無いはずである。実際、Samantapāsādikā はC部分にあらためて注釈をつけない。上記S－①部分（Samantapāsādikā 引用文の末尾）がC部分の注釈であるが、kathaṃ （どのようにして）という語の注だけで、あとの語については何も言わない。それ以前のA部分の注釈でそれはすべて済んでしまっているからである。もしAとCに共通の語がなく、全く異なる文章であったなら、Samantapāsādikā はAを注釈する際には独自の注釈を作成し、Cを注釈する段階で、同じC部分を注釈する Visuddhimagga の文章をそのまま丸ごと転用したはずである。しかしAとCの語句のほとんどが共通であったため、先にAを注釈する際に、Visuddhimagga のC注釈部分を並べ替えて使ってしまったのである。それ故、Samantapāsādikā がC部分を

注釈する段階では、そこにある語句はすべて注釈済みということになるから、Cの部分は注釈を付ける必要がないのである。

Vinaya のB部分に対する Samantapāsādikā の注釈（上記引用文中、「それはたとえば」以下の下線のついていない箇所）は Samantapāsādikā 独自の注釈文であって Visuddhimagga には対応文がない。これはすでに指摘したとおり、Visuddhimagga がC部分だけを「簡潔な文句」として採用しており、その前のA，B部分には注釈をつけていないからである。(Visuddhimagga がB部分をすべて省略してしまっていることは、先に指摘したとおりである)。

以上が全体構造の違いに関する説明である。次にS－③が三カ所に分裂している理由を考えてみる。Visuddhimagga のV－③と Samantapāsādikā のS－③は対応しているが、V－③が一文であるのに対してS－③はそれが三つに分かれて別の箇所に置かれている。この奇妙な現象には何らかの理由があるのだろうか。説明の都合上、当該個所の和訳を下に再提示する。

V－③：**安般念三昧**とは、安般を完全に把握する念と結びついた三昧である。あるいは安般念における三昧が安般念三昧である。

S－③（下線部）：**安般念**とは、安般を完全に把握する念である。『無礙解』にも次のように説かれているからである。「安（āna）とは入息（assāsa）であって出息（passāsa）ではない。般（pāṇa）とは出息であって入息ではない。入息の力による近住（upaṭṭhāna）が念である。出息の力による近住が念である。入息する者には［念］が近住し、出息する者には［念］が近住する」と。**三昧**とは、その、安般を完全に把握する念とともに生じる心一境性である。この説示は、三昧を主眼とするもので、念を主眼とするものではない。それゆえ、安般念と結びついた三昧が安般念三昧であり、あるいは安般念における三昧が安般念三昧であると、このようにここでの意味は理解されるべきである。

V－③の文章がS－③で利用されていることは明らかである。しかし単にそれを移しかえたものではない。途中に新たな説明が加わって増広されており、そのためもとのV－③の文が分断された形になるのである。V－③は単純に「安般念三昧」という語を説明している。安般や念、三昧といった個々の要素の意味はすでに分かっているという前提のもとに、その安般と念と三昧がどう関係して安般念三昧という術語が成立しているかを語っているにすぎない。それに対してS－③のほうは、その安般や念、三昧という各要素の定義を一々解説しようとしている。前稿までの調査によって見れ

ば、Visuddhimagga→Samantapāsādikā という成立順序は間違いないであろうから、V－③をもとにS－③が作成されたと仮定するなら、V－③をそのまま転用したのでは何か都合が悪いために、増広してS－③の形にしたのではないかと推測される。Samantapāsādikā がV－③をそのまま転用した場合、どのような点に不都合が生じるかというと、V－③のままでは安般、念、三昧という個々の要素の意味が説明できず、注釈として不十分なままになってしまうのである。

まず安般念という語について見てみる。V－③ではそれを「安般を完全に把握する念」と定義しているから、S－③はそれをそのまま利用している。安般念という複合語自体に関してはそれで問題ない。しかしその中の安般というのが何かという点に関しては Visuddhimagga には言及がない。Visuddhimagga 全体にわたって探してみても安般（ānāpāna）の定義は書かれていないのである。これは Visuddhimagga の記述ミスともいえる。安般を定義せずに、安般念だけを規定しているのである。Samantapāsādikā がこれを不備であると認識していたかどうかは分からないが、ともかく安般念を定義するにあたっては先ず安般の意味を明確にしておかねばならないと考えたことは間違いない。その安般の定義は Visuddhimagga にはないのだから、Visuddhimagga を利用することはできない。そこで別の権威ある文献から探し出してこざるを得ない。それが『無礙解』（Paṭisambhidā）からの引用文なのである。これによって安般および安般念の定義は明確に示されることとなり、Samantapāsādikā の注釈は十全となるのである。Visuddhimagga と Samantapāsādikā の作者がブッダゴーサであるかどうかは未確定であるが、もし仮にそうであったとするなら、この箇所は、Visuddhimagga の段階の不備を意識したブッダゴーサが、Samantapāsādikā を書く段階でそれを『無礙解』によって補修したということになるであろう。

次に三昧の定義であるが、これもV－③には書かれていないものがS－③に加えられている。「三昧とは心一境性である」という、この三昧の定義は、Visuddhimagga の場合、ここよりも前の箇所で度々語られている。初出箇所は第三品「業處把握の説示」の冒頭である。そこでは三昧とは「善なる心一境性」であると定義される。（kusalacittekaggatā samādhi, Vism p. 84）. そのあとも、この定義を受けて三昧が心一境性であることは Visuddhimagga の各所で繰り返し明示される。したがって Visuddhimagga がV－③においてあらためて三昧の定義を示す必要はない。ところが Samantapāsādikā の場合、ここよりも前に三昧を心一境性であると定義する箇所はない。したがってここで定義しておかないと注釈として不完全なものとなってしま

う。そこで、Visuddhimagga の解釈を受けて、三昧とは心一境性である、という注釈を加えたのである。これによって安般、念、三昧の意味が明確となり、したがって安般念三昧の意味も正しく示されることになるのである。

以上、安般念に関する Visuddhimagga, Samantapāsādikā それぞれの説明文の冒頭箇所に関して考察した。そしてここで『解脱道論』に目をやると、非常に興味深い記述が存在することに気がつく。

『解脱道論』は Visuddhimagga の底本となったアバヤギリ派の論書であるとされている。したがってその構成は Visuddhimagga とほぼ一致する。今回とりあげた安般念の解説も、Visuddhimagga と同じく、業處修習法の中、四種念の中の一つに含まれている[10]。大正三十二巻の429ページ下段から431ページ下段までである。この部分を Visuddhimagga と比較してみると、まず冒頭の「簡潔な文句」に関しては、両者が正しく対応していることがわかる。『解脱道論』でもそれはA→Cという構造をとり、しかも Vinaya や Saṃyutta Nikāya のC部分の末尾にあった一文が存在しないという点も Visuddhimagga に合致する[11]。しかし、その「簡潔な文句」に続く「詳細な解説文」については、異同が激しく、極めてよく一致する記述と、全く一致しない記述が入り乱れる。このように、Visuddhimagga と『解脱道論』が、全体の構成は同一であっても、個々の要素に多くの相違点を含むという事実は、現在継続中の仏教大学総合研究所における我々の研究会においても確認していることであって、今さら驚くことではない[12]。それは『解脱道論』全体に通ずる特徴なのである。ここで注目すべきは『解脱道論』が、その「簡潔な文句」の前、すなわち安般念の解説を始める、その冒頭部分に、Visuddhimagga には存在しない文を置いているということである。その文とは以下のようなものである[13]。

問曰。云何念安般。何修何相何味何處何功徳。云何修行。答曰。安者入。般者出。於出入相彼念隨念正念。此謂念安般。心住不亂此謂修。令起安般想爲相。觸思惟爲味。斷覺爲處。

質問する。念安般とは何か。その修、相、味、處、功徳とは何か。[まず] 修行とは何かというと、答えて言う。安とは入である。般とは出である。出入の相における彼の念は隨念であり正念である。これを念安般という。心が住して乱れな

10) ただし Visuddhimagga では、その四念が死念、身念、安般念、寂止念の順になっているのに対し、『解脱道論』では安般念、死念、身念、寂止念となっている点に大きな違いがある。

11) 大正 三十二巻, 429c18－430a7.

12) この研究会の参加者は松田和信、辛島静志、山極伸之および私の四人である。

13) 大正 三十二巻, 429c14－18.

いこと、これを修という。安般相を起こすことを相と為す。觸の思惟を味と為す。覚を断ずるを處と為す。

ここは念安般すなわち安般念の定義文である。Visuddhimagga や『解脱道論』で、ある事項を定義する場合は相、味、起、處の四項目で説明するのが常であり、さらにそれに加えて修習法や功徳が示される場合もある[14]。ところがここでは、この一般則からはずれて冒頭に「修」が来ている[15]。たとえ修が入るにしても、それは通則から言えば處のあとになるはずである。それが冒頭に来ている点が不自然なのである。そこで、その修の説明のところまでで区切ってみる。「安とは入である。般とは出である。出入の相における彼の念は随念であり正念である。これを念安般という。心が住して乱れないこと、これを修という」。この文は先に提示したS－③の文と類似する。そしてS－③で「三昧とは、その、安般を完全に把握する念とともに生じる心一境性である」となっている文の「三昧」が「修」に相当するようにも見える。類似の度合いについては是非もあろうが、ともかく「安とは入である。般とは出である」という句の存在は、これがS－③と何らかの対応を持っていることを明示している。あくまで仮定であるが、『解脱道論』の編者もしくは改編者は、S－③の説明文を導入するために修、相、味、處、功徳という特殊な定義形式をここに置いたのかもしれない。そうすれば、S－③の文を、修の説明文という形でそのまま冒頭に置くことに無理が生じないと考えたからである。詳しい状況は分からない。しかしとにかく、『解脱道論』には Visuddhimagga にはない「安とは入である。般とは出である」という句が存在しているのである。しかも、それは、後の挿入のような様相を示している。この句は先に指摘したように、Visuddhimagga にはない。そして Samantapāsādikā は、その不備を補うために『無礙解』の文を引いてわざわざ Visuddhimagga からの転用文中に組み込んでいる。それと同じ文が『解脱道論』に存在している事実は一体何を示しているのであろうか。ここでまたも我々は、Samantapāsādikā と『解脱道論』の近似点にでくわしたことになる。Visuddhimagga には存在していない説明文が、それよりも前に成立していたと想定される『解脱道論』と、それより後の成立である Samantapāsādikā の両方に現れ、しかもどちらの場合も、その文があとから挿入されたように見える。しかしその挿入の方法は両者で全く異なっているというわけであ

14) 『南伝大蔵経』第六十二巻「清浄道論一」，p.19の注1において水野弘元は相、味、現起、足處の四項目が、南伝仏教における事柄定義の定型であることを指摘している。

15) ここには最後の、功徳の説明が抜けているように見えるが、実は、その功徳の説明こそが、このあとに続くA→Cという構造の「簡潔な文句」そのものなのである。なお、ここで「起」が抜けている理由は不明である。

る。Samantapāsādikā は、『無礙解』を典拠として引用する。『解脱道論』は引用のかたちを取らずにいきなり冒頭に置く。この違いが両者の無関係性を反映すると考えるなら、Samantapāsādikā と『解脱道論』は、互いに全く関係なく、たまたま同じく、説明の不備を補うために、この句を組み込んだ、と言うことができよう。しかし組み込み方が違うのにはそれなりの理由があるのかもしれない。たとえば『解脱道論』がそのような補正を行っているのを知った Samantapāsādikā の作者が、自分の造っている Samantapāsādikā にも同じように補正を加えようとしたと仮定してみよう。Samantapāsādikā は、すでに存在している Visuddhimagga をそのまま利用する形で注釈をすすめているわけだから、Visuddhimagga の構成から大きく逸脱することはできない。現存『解脱道論』のように全体の構成を定義文の形式に直して冒頭に置くことは困難であろう。そこで『解脱道論』の形式はとらずに、補正文の直接の出所である『無礙解』からの引用、というかたちで途中に挿入したと考えることも可能である。ほかにもいろいろな状況が想定できる。しかしいずれも推測の域はでない。Visuddhimagga にはない記述が Samantapāsādikā と『解脱道論』に共通して存在するという事実を指摘するに留めざるを得ないのである。

○このあとも Samantapāsādikā は延々と Visuddhimagga の文章を転用していく。内容はひたすらに安般念の修行方法である。平行な文が SamantapāsādikāPTS 本で約十ページ半も続いたのち、次の相違点が現れる。Samantapāsādikā415ページ19行目、Visuddhimagga では277ページ25行目である。冒頭で示した Vinaya 本文の文章（そしてそれに対応する Visuddhimagga の「簡潔な文句」）の中、①から⑯まで番号を付した修行方法のうちの④「『私は身行を安静として、出息しよう』と学び、『私は身行を安静として、入息しよう』と学ぶ」までの説明が終わったところである。この①～④は、身・受・心・法のうちの身観念處に分類される。それに関して Visuddhimagga は次のように語る。

Vism p. 277, ll. 20－28.

また、ここでは、この［第一の］四［法］は初学者の業處に関して説かれたのである。一方、他の三つの四［法］は、ここではすでに禅を得た者の受、心、法の随観に関して説かれたのである。それゆえ、この業處を修習して安般による第四禅を足處とする観（vipassanā）によって諸無礙解とともに阿羅漢果を得ようと望む初学者の善男子は、先に説いた理屈により、戒の清めなどのすべての作業をなしてから、先に説いた種類の阿闍梨のもとで五節なる業處を把握せよ。

yasmā pan' ettha idam eva catukkaṃ ādikammikassa kammaṭṭhānavasena vuttaṃ, itarāni pana tīṇi catukkāni ettha pattajhānassa vedanā－citta－dhammānupassanāvasena vuttāni, tasmā idaṃ kammaṭṭhānaṃ bhāvetvā, ānāpānacatukkajjhānapadaṭṭhānāya vipassanāya saha paṭisambhidāhi arahattaṃ pāpuṇitukāmena ādikammikena kulaputtena pubbavuttanayen' eva sīlaparisodhanādīni sabbakiccāni katvā vuttappakārassa ācariyassa santike pañcasandhikaṃ kammaṭṭhānaṃ uggahetabbaṃ.

Samantapāsādikā では、この下線部分がなく、その代わり、PTS 本で約二ページ半にもなる、別の文章が挿入されているのである (Smp p. 415, l. 19－p. 417, l. 27)。その内容は「戒の清め」、「種々の作務の実践」、「住處など十の障礙の除去」、「正しい指導者の選定」である[16]。

上の文によれば、安般念の修行方法のうち①～④は初学者のためのものであるという。そしてその初学者が具体的にどのような準備段階を経て業處の把握にとりかかるかは、「先に説いた」として、ここでは省略されている。そういった準備段階は省略して、ここでは主眼となる業處の把握そのものについてのみ説明していくという意味である。確かに Visuddhimagga では、ここよりもずっと前の箇所、冒頭の「戒の解釈」から「地遍の解釈」の章にわたって広く詳細に準備段階を説いている。いまさらここで再説する必要などない。しかし Samantapāsādikā は、ここ以前にこういった業處修習者の準備的作業を語る機会はなかったのだから、「先に説いた」と言うわけにはいかない。先には、どこにも説いていないのである。したがって上の Visuddhimagga の文をそのまま転用することはできない。Visuddhimagga なら「先に説いた」と言って数行で省略して語ることのできる準備段階を、一からあらためて説明しなければならないのである。かといって Visuddhimagga 全体の六分の一にも達するかと思われ

16) 「戒の清め」は Visuddhimagga pp.15－46において、「種々の作務の実践」は pp.11－12において、「住處など十の障礙の除去」は pp.89－97において、「正しい指導者の選定」は pp.97－101において説かれている。Samantapāsādikā は、Visuddhimagga のこういった文章を要約して、約二ページ半の独自の説明文を作成したのである。中でも「正しい指導者の選定」における、一切業處 (sabbatthakammaṭṭhāna) と応用業處 (pārihāriyakammaṭṭhāna) の説明に際しては、かなりの部分を Visuddhimagga からそのまま転用している。つまり Visuddhimagga に省略があるため、そのまま転用することができない部分を穴埋めするために Samantapāsādikā が独自に作成した挿入文の中に、Visuddhimagga の別の箇所の文がそのまま転用されているという、複雑な構造になっているのである (Smp p. 416, l. 12－p. 417, l. 8＝Vism p. 97, l. 23－p. 98, l. 15)。

る準備段階の解説をそのままもってくることなどとうてい不可能であるから、Samantapāsādikā では、その内容をまとめて独自の文章を作り、下線部の代わりに挿入したというわけである。このような理由で、Visuddhimagga の下線部分が Samantapāsādikā では別の文に置き換わっている、という説明は、すでに水野弘元が『南伝大蔵経』で注記している[17]。Samantapāsādikā は安般念を注釈するに際して、Visuddhimagga の文章を丸ごと転用しようとするが、文脈に矛盾をきたすため、どうしても転用できない箇所に限っては、丹念にそれを補正しているのである。

○上の準備的作業の手順に続いて Visuddhimagga は修行者が阿闍梨のもとで実際に安般念を学習する方法を語る。安般念を修習するためにはまず安般念業處の五節 (sandhi) を理解し、阿闍梨のもと、あるいはその他の適当な場所に身を置いて心身を適切な状態にしながら安般念業處を作意していくのである (Vism pp. 277－278)。さらにそのあと、その安般念業處の作意を数 (gaṇanā)、随結 (anubandhanā)、触 (phusanā)、置止 (ṭhapanā)、観察 (sallakkhanā)、還滅 (vivaṭṭanā)、遍浄 (pārisuddhi)、各別観 (patipassanā) に分類し、その各々について詳しく説明していく (Vism pp. 278－287)。Samantapāsādikā は、このあたりの文章をほぼそのまま転用しているのだが、中には直前のケースと同じく、Visuddhimagga ではすでに説明済みとして省略している部分を、Samantapāsādikā では省略することができず、別個に説明文を創って挿入している箇所がある。今ここで問題になるのは安般念修行者が業處修習のために身を置くべき場所である。Visuddhimagga はそれを次のような文によって説明する。

Vism p. 278, ll. 5－13.

それゆえ少し教わっては長い時間かけて学誦し、このようにして五つの接合からなる業處を把握し、阿闍梨のもとで、あるいは先に説いたような住處に住んで、細かい障礙を除外し、食事を終え、食後の眠気を追い払い、楽に座って、三宝の徳を随念して、心を喜ばせて、阿闍梨から把握した一つの句をも忘れることなく、この安般念業處を作意しなければならない。

tasmā thokaṃ uddisāpetvā bahukālaṃ sajjhāyitvā evaṃ pañcasandhikaṃ

17) 『南伝大蔵経』第六十三巻,「清浄道論二」, p.126, note 33. 水野はここで「既に地遍の説明の際に述べたることなれば、本書はこれを略せるなり」と言っているが、正確には地遍の説明だけでなく、その前のいくつかの章で述べている記述も含めた、修行の準備段階全体が「先に説いた」こととして省略されているのである。

kammaṭṭhānaṃ uggahetvā ācariyassa santike vā aññatra vā pubbe vuttappakāre senāsane vasantena upacchinnakhuddakapaḷibodhena katabhattakiccena bhattasammadaṃ paṭivinodetvā sukhanisinnena ratanattayaguṇānussaraṇena cittaṃ sampahaṃsetvā ācariyuggahato ekapadam pi asammuyhantena idaṃ ānāpānassatikammaṭṭhānaṃ manasikātabbaṃ

修行者が安般念業處を作意する際に住まうべき場所は下線部で示されている。「阿闍梨のもとで、あるいは先に説いたような住處に」住めと言っているのであるが、ここで「先に説いたような」とは、Visuddhimagga がここよりもずっと前の箇所、すなわち地遍の解釈の章（Paṭhavīkasiṇa-niddesa）の冒頭で、修行に適した住處を解説している箇所を指す[18]。そこには修行者が住むべきでない住處および住むに適した住處の一々が、PTS 本で約5ページにわたって詳細に説明されている。Visuddhimagga が「先に説いたような」と言っているのはその部分なのである。しかし Samantapāsādikā にはそのような住處の解説文は存在しないのであるから、「先に説いたような」とは言えない。当然、この部分だけは Visuddhimagga をそのまま転用することができないことになるから、Samantapāsādikā では、ここに独自の文章を創って置き換えている。それが以下の文中の下線部である。

Smp p. 418, ll. 9－23.

それゆえ少し教わっては長い時間かけて学誦し、このようにして五節からなる業處を把握し、もしそこに適当な［住處が］あればそこに住め。もしそこに適当な［住處が］なければ、阿闍梨の許しを得て、鈍智の者は最大で一ヨージャナ離れたところへ行き、鋭智の者なら遠方にまで行って、住處としての十八種の欠陥がなく、住所の条件である五種の支を具えた住處に近づいて、そこに住んで、細か

18) Vism p. 118, l. 1－p. 122, l. 23. この箇所が「地遍の解釈」の章に含まれていることは実は不適切である。実際に地遍の修習の説明が始まるのはもっとあと、PTS 本でいうと122ページの31行目「あたり」からであって、そこまでは地遍だけでなく、すべての業處修習に共通する準備行動を一般的に述べている。したがってここまでは先行する別の章つまり「業處把握の章（kammaṭṭhāna-gahaṇaniddeso）」に含まれるべきなのである。ただし、その122ページ31行目のあたりをみると、業處全般を修習するにあたっての準備行動の解説から、地遍という特定の業處の修習へと切れ目なく連続的にテーマが移っているため、ここで章を改めることができないような文章構造になっている。したがって内容からいえばここで章が変わるべきではあっても、実際に文を切って別の章立てを構えることは不可能なのである。そのために、内容上の切れ目を無視して、そこよりも前の箇所で無理に章題を変えたのではないかと思われる。そのために、すべての業處修習に共通する準備行動である「適切な住處の選択」が、「地遍の解釈」の章に含まれてしまったのである。このことから見て、現在の Visuddhimagga の章立ては、作者自身によってなされたものではなく、後代、別人によってなされた可能性が高くなる。

い障礙を除外し、食事を終え、食後の眠気を追い払い、三宝の徳を随念して、心を喜ばせて、阿闍梨から把握した一つの句をも忘れることなく、この安般念業處を作意しなければならない。ここのこれは要約である。この話を詳しく知りたい者は、Visuddhimagga によって理解せよ。さらに、「この安般念業處を作意しなければならない」と説かれた、それに関して、以下のような作意の規定がある。

tasmā thokaṃ uddisāpetvā bahukālaṃ sajjhāyitvā evaṃ pañcasandhikaṃ kammaṭṭhānaṃ uggahetvā sace tattha sappāyaṃ hoti tatth' eva vasitabbaṃ. no ce tattha sappāyaṃ hoti ācariyaṃ āpucchitvā sace mandapaññо yojanaparamaṃ gantvā sace tikkhapaññо dūram pi gantvā aṭṭhārasasenāsanadosavivajjitaṃ pañcasenāsanaṅga-samannāgataṃ senāsanaṃ upagamma tattha vasantena upacchinnakhuddakapaḷibodhena katabhattakiccena bhattasammadaṃ paṭivinodetvā ratanattayaguṇānussaraṇena cittaṃ sampahaṃsetvā ācariyuggahato ekapadam pi apammussantena imaṃ ānāpāṇāsatikammaṭṭhānaṃ manasikātabbaṃ. ayam ettha saṅkhepo vitthārato pana imaṃ kathāmaggaṃ icchentena Visuddhimaggato gahetabbo. yaṃ pana vuttaṃ imaṃ ānāpāṇasatikammaṭṭhānaṃ manasikātabban ti tatrāyaṃ manasikāravidhi.[19]

Visuddhimagga が「先に説いたような住處」として指示する118ページの1行目から122ページの23行目の箇所には、確かに修行者が住むのに適さない十八の欠陥と、適当な住居が具えるべき五種の支分が詳しく語られている。Samantapāsādikā は、この五ページにわたる詳細な解説を要約して上文の下線部分を作り、挿入したのである。五ページ全文をここへ転用することは不可能なので、要約を作って一応の体裁だけは整え、詳しくは Visuddhimagga を見よ、と言って実際の説明は Visuddhmagga に譲っているわけである。

○Samantapāsādikā と Visuddhimagga では、上記の箇所で食い違いを見せたあとは、再び延々と平行文が続く。安般念の修行法である。つまり Samantapāsādikā は、Vinaya の中の安般念修行の記述を注釈するために、基本的には Visuddhimagga 中

19) Visuddhimagga では「食後の眠気を追い払い (bhattasammadaṃ paṭivinodetva)」のあとに「楽に座って (sukhanisinnena)」の語があるが Samantapāsādikā では欠。また Samantapāsādikā で「忘れることなく」が apammussantena となっているところが、Visuddhimagga では asammuyhantena となっている。

の安般念修行の文を丸ごと転用しようとしているのであり、どうしてもそのままでは転用できないような箇所、たとえばVisuddhimaggaが「すでに説いたように」といった文句をだしてくる箇所に限って、独自の説明文を作って置き換えるのである。この平行関係は、Samantapāsādikā p. 428, l. 21（＝Visuddhimagga p. 286, l. 18）まで続く。そこまでは、多少の語句の相違は見られるものの、全く同内容の記述が、ほぼ同一の文章で続くのである。そしてSamantapāsādikā p. 428, l. 21（＝Visuddhimagga p. 286, l. 18）にいたって、次の食い違いが現れる。そこにおけるVisuddhimaggaの文章は次のようである。（下線①の文がSamantapāsādikāでは別の文に置き換わっており、下線②の部分はSamantapāsādikāでは欠落している。）

Vism p. 286, l. 16－p. 287, l. 1.

このように［似］相が現起してから以後は、彼の［五］蓋は鎮伏せられ、諸煩悩は止滅し、念が現起し、心は①近行定によって等持するのである。そこで彼は、その相を色によって作意してはならないし、特徴によって観察してはならない。ただ、クシャトリアの王妃が転輪王の胎児を［護るように］、そして農夫が稲や麦の穂を［護るように］、住處などの七つの不適切を避け、七つの適切なことが習用されることによって、よく護られねばならない。こうしてこのようにその［相］を護って、何度も何度も作意することで、増大させ、増長させてから、十種の安止善巧が完遂されねばならず、精進の平等が努力されねばならない。このように励む者には、地遍のところで説いたのと同じ次第で、その相に関して四種または五種の禅が生じる。このようにして四種、五種禅を起こした比丘は、ここにおいて、観察と還滅によって業處を増大させ、遍浄を得ようと欲して、その禅を五つの様相によって自在へと到達させ、熟達させて、名色を判別させ、観に確立させるのである。どのようにか。彼は三昧から起って業生身と心とは出息入息の集であると見るのである。すなわち、たとえば鍛冶屋の鞴（ふいご）で火を吹く際に、鞴と、それに応ずる、人の努力を縁として風が起こるように、同様に、身体と心を縁として出息、入息が［起こる］のである。それから、出息、入息と身体とを色であると［判別し］、心と、それに結びついた諸法とを無色であると判別する。②以上は、ここにおける略説である。詳細な名色の確立は、後ほど明らかとなるであろう。このように名色を判別してから、その縁を探す。そして探そうとしてそれを見て、三世における名色の転起に関する疑惑を離れるのである。

tass' evaṃ nimittupaṭṭhānato pabhuti nīvaraṇāni vikkhambhitān' eva honti, kilesā sannisinnā va, sati upaṭṭhitā yeva, cittaṃ ①upacārasamādhinā samāhi-

tam eva. athā 'nena taṃ nimittaṃ neva vaṇṇato manasikātabbaṃ, na lakkhaṇato paccavekkhitabbaṃ. Api ca kho, khattiyamahesiyā cakkavattigabbho viya, kassakena sāli-yavagabbo viya ca, āvāsādīni satta asappāyāni vajjetvā tān' eva satta sappāyāni sevantena sādhukaṃ rakkhitabbaṃ. atha naṃ evaṃ rakkhitvā punappunaṃ manasikāravasena vuddhiṃ virūḷhiṃ gamayitvā dasavidhaṃ appanākosallaṃ sampādetabbaṃ, viriyasamatā yojetabbā. tass' evaṃ ghaṭantassa pathavīkasiṇe vuttānukkamen' eva tasmiṃ nimitte catukka-pañcakajjhānāni nibbattanti. evaṃ nibbattacatukka-pañcakajjhāno pan' ettha bhikkhu sallakkhaṇa-vivaṭṭanā vasena kammaṭṭhānaṃ vaḍḍhetvā pārisuddhiṃ pattukāmo tad-eva jhānaṃ pañcah' ākārehi visippattaṃ paguṇaṃ katvā nāmarūpaṃ vavatthapetvā vipassanaṃ paṭṭhapeti. kathaṃ? so hi samāpattito vuṭṭhāya assāsapassāsānaṃ samudayo karajakāyo ca cittañ cā ti passati. yathā hi kammāragaggariyā dhamamānāya bhastañ ca purisassa ca tajjaṃ vāyāmaṃ paṭicca vāto sañcarati, evam eva kāyañ ca cittañ ca paṭicca assāsapassāsa ti. tato assāsapassāse ca kāyañ ca rūpan ti cittañ ca taṃ-sampayuttadhamme ca arūpan ti vavatthapeti. ②ayam ettha sankhepo. vitthārato pana nāmarūpavavatthānaṃ parato āvibhavissati. evaṃ nāmarūpaṃ vavatthapetvā tassa paccayaṃ pariyesati, pariyesanto ca naṃ disvā tīsu pi addhāsu nāmarūpassa pavattiṃ ārabbha kankhaṃ vitarati.

Samantapāsādikā では、下線部①に代わって PTS 本で約二ページ半にわたる別の文が置かれており、さらに下線②の文章は欠落している。下線部①には「地遍のところで説いたのと同じ次第で」という句が、下線部②には「詳細な名色の確立は、後ほど明らかとなるであろう」という句が含まれており、どちらも Visuddhimagga の別の箇所を参照することが求められる。したがって、そういった「別の箇所」が存在しない Samantapāsādikā では、Visuddhimagga の句をそのまま転載することはできない。そのため下線部①に関しては、地遍の修習に関する Visuddhimagga の長大な説明文を PTS 本約二ページ半の文章にまとめて挿入し、一方の下線部②に関しては単純にそれを削除してしまったものと考えられる。

下線部①のかわりに挿入されている Samantapāsādikā の文章は次のような内容を含んでいる。1. 似相が現起したのちの等持心には二段階がある。近行地（upacārabhūmi＝近行定）と獲得地（paṭilābhabhūmi＝安止定）である。2. その二種の地の作用にはどのようなものがあるか。3. 相を護るための七種の不適切なことがら

と、七種の適切なことがら。4．有分を断じ、意門転向心を起こすための十種の安止善巧。5．安止に至る四段階または五段階の心の過程。6．Godha 上座の異説。7．安止の心は色界に属し、それ以前の段階の心は欲界に属す。8．初禅ないし第四禅の獲得（この部分に関する詳細は Visuddhimagga を見るように指示されている）。9．第四禅に到達した比丘で、遍浄（pārisuddhi）を得ようとする者による、五種の自在の獲得。10．色と無色の判別。　このうち1～8は、Visuddhimagga PTS 本でいうと pp. 126－168の内容を要約したもの。9～10は pp. 286－287の内容を要約したものである。なお、その p.287において Visuddhimagga は10に関して簡略な説明を与え、詳細は「後に明らかにされるであろう」と言って後の章（第十八品，p.587以下）に譲っている。Samantapāsādikā は、その Visuddhimagga　p. 287の簡略な説明と、同じ Visuddhimagga 第十八品における詳説の両方を参照して、独自の説明文を作っている。このように下線部①のかわりに挿入されている Samantapāsādikā の文章中には、第十八品の要約も一部含まれているのであるから、「詳細な名色の確立は、後ほど（つまり第十八品で）明らかとなるであろう」という下線部②の言葉はもはや不要なものとなる。それで下線部②は単純に消去されたのである。

結

以上、Visuddhimagga と Samantapāsādikā の対応関係を、主に引用文を手掛かりとして考察してきた。Samantapāsādikā が Visuddhimagga の文章を利用しているという事実は全く疑う余地がない。両者の成立順序は Visuddhimagga→Samantapāsādikā となる。問題はその作者であるが、これは未だ未解決である。Samantapāsādikā の作者が Visuddhimagga に熟達しており、その内容を完全に頭の中に入れていたことは間違いない。それは、Samantapāsādikā に引用する際の、極めて緻密な補正作業の様子から明らかである。しかしだからといって、それが両書の作者を同一人とする根拠にならないことは言うまでもない。この点に関しては、別の面からのアプローチが必要であろう。

『解脱道論』との間に奇妙な関係が見いだされたことは興味深い。Visuddhimagga の文章が Samantapāsādikā に引用される際、教義に関して修正が加えられ、その修正説が『解脱道論』と一致するのである。三回の連載中、各回毎に一カ所ずつそのような点が見つかったので、しっくり落ち着いた気がして少しうれしい。これがブッダゴーサの思想とどう関連するのか、あるいはマハーヴィハーラ、アバヤギリ両

派の対立とどう関わっているのか、現段階では何ら結論を出せないが、今後、別の情報と組み合わせることで利用価値がでるものと期待している。

最後に水野弘元博士の研究に感謝の意を表しておきたい。『南伝大蔵経』「清浄道論」における博士の正確な訳と詳細な注は、本稿にとっての最良の案内であった。もちろん基本資料はパーリ語原典であるが、それでも博士の訳と注がなければ複雑な構造の分析は不可能だった。博士の学恩に心より感謝申し上げます。

訂正 1

前稿「Visuddhimagga と Samantapāsādikā (2)」において誤りがあったので訂正しておく。前稿 pp. 60－61で示した宿住随念知に関する Visuddhimagga の「簡潔な文句」B^2であるが、私はその出典を Sāmaññaphalasutta であると断定した。B^2とパラレルな文を含む経典は他にもあるのだが、神変→天耳界→他心智→宿住随念知→死生智という Visuddhimagga と同じ説明順序をとる資料は Sāmaññaphalasutta だけだと考えたからである。しかしこれは間違いで、同類の説明文は Sāmaññaphalasutta だけでなく、Dīghanikāya の中の多くの経にも存在している。この文は Dīghanikāya の中、「戒蘊品」と呼ばれる一群の経典に共通する反復表現の一部であり、テキストではそれが省略されているため気づきにくいのだが、実際は一連の経典に同じ形で含まれているのである。したがって前稿でのB^2の出典に関する結論は「Dīghanikāya の中、Sāmaññaphalasutta を初めとする、戒蘊品に属するほとんどの経典で繰り返し説かれる修行道を示す教説が、その出典である」と訂正しなければならない。また、これと同様の理由で、「Visuddhimagga と Samantapāsādikā (1)」p. 46, 注16) の「類似の句は沙門果経にもある」と書いたところは「類似の句は Dīghanikāya 戒蘊品経典の反復表現中にも見られる」としなければならない。実は Dīghanikāya 戒蘊品にこのような反復表現があり、そこに四禅や六通といった修道の階梯が示されていることは友人山極伸之氏からすでにうかがい聞いていたことであったのだが、先の論文を書いているときはそのことを失念しており、その結果、こんなミスを犯すことになってしまった。前稿を読んだ山極氏が私の間違いに気づき、指摘していただいたお陰で、ここでこうやって訂正することができた。山極氏から同じことを二度も教示されることとなったおのれの不明に恥じ入っている[20]。

---

20) 山極伸之「パーリ長部「戒蘊品」と律蔵」,『佛教大学文学部論集』第80号, 1996, pp. 35－51.

訂正2

前稿「Visuddhimagga と Samantapāsādikā（2）」の最後の脚注が途中で切れている。80ページの注11）である。そこは「最大の縁覚というのはagga-paccekabuddhaと想定されるが縁覚には最大も最小もないか」で途切れているが以下は次のように続く。「らこれは意味がない。おそらく直前の「最大の声聞」にひかれて生じた翻訳ミスであろう」。この欠落は、友人勝本華蓮氏の御教示によって気づいたものである。